

白田片瀬コンパクトシティ検討会議
レポート

令和7年3月
東 伊 豆 町

白田片瀬コンパクトシティ検討会議レポート

はじめに

2024年4月、人口戦略会議が「消滅可能性自治体」を発表しました。これは、20～39歳の若年女性人口の減少が出生数の低下に直結することから、若年女性人口の将来動向に着目して分析したものであり、2014年に公表された「消滅可能性自治体」リストの続編にあたります。

若年女性人口が2020年から2050年までの30年間で50%以上減少する自治体を「消滅可能性自治体」と定義していますが、残念ながら当町はこの定義から脱却することができませんでした。

現在、当町では「東伊豆町まちづくり総合指針」を策定し、「人口を減らさない、減っても耐えうるまちづくり」を目指しています。人口減少が進む中でも、地域コミュニティの維持や公共・民間サービスの低下を可能な限り抑え、町民が住みやすい環境を保つため、まず白田片瀬地区をモデルとして検討を開始し、他地域への展開を目指して、令和6年度に白田片瀬コンパクトシティ検討会議を開催しました。

本レポートは、今後策定されるグランドデザインの参考資料として位置付け、白田片瀬地区の将来像についてどうあるべきかを検討し作成しました。

1 白田片瀬地区について

白田片瀬地区は、白田川の右岸が白田地区、左岸が片瀬地区となっており、かつては白田村と片瀬村に分かれていました。

地区内には国道 135 号線と伊豆急行線が通っており、白田地区には片瀬白田駅があります。また、両地区の国道沿いにはコンビニエンスストアや商店、飲食店が並び、賑やかな雰囲気が広がっています。

この地区は、町内で唯一区画整理が実施され、広く整備された道路や都市公園が設けられ、産業面では、一次産業として白田地区にある白田港を拠点とした漁業や柑橘類、わさびなどの農業が営まれていると同時に豊富な温泉を活用した小規模から中規模の旅館が点在し、町内 6 温泉郷の一角を形成しています。また、地域内には評判の良い飲食店が多く、片瀬地区にはスーパーマーケットもあるため、利便性の高いコンパクトなまちづくりが進んでおり、移住者からも選ばれる地域となっています。

健康面では、保健福祉センターを中心に病院や歯科医院が点在し、地域における健康の維持と増進を支える重要な拠点となっています。

人口と世帯数は 2, 213 人、1, 297 世帯ですが、町内の他地域と比較すると減少率が小さい点が特徴です。

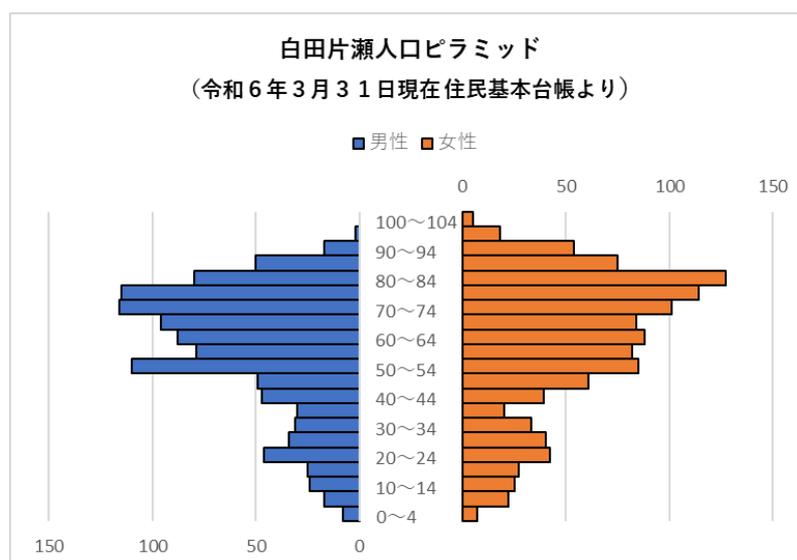
令和 6 年 3 月 31 日現在

地区名	人口 (人)			世帯数 (戸)
	男	女	合計	
片瀬	485	498	983	590
白田	579	651	1,230	707

<参考>

(湯ヶ岡)	(293)	(344)	(637)	(355)
(白田浜)	(286)	(307)	(593)	(352)

注：白田地区 = 湯ヶ岡+白田浜



白田川の下流域は、白田片瀬地区の市街地が分布しており、白田川や地区の両側に多く存在する急傾斜地形からの水害や土砂災害など、過去の被害等を踏まえた防災面の対策が順次実施されています。

一方、沿岸部では、地震による津波の影響が伊豆急行線付近までの範囲で懸念されており、第4次地震被害想定に基づき、津波ハザードマップの公表などを行っています。

風水害に関しては、昭和33年の狩野川台風で白田川が氾濫し、大きな被害を受けました。それ以降、氾濫は発生していませんが、令和元年の台風をはじめ、護岸の被災は何度か発生しています。また、狩野川台風の際には、東泉院の裏山や東映ホテル付近で大規模な土砂崩れが発生しました。

昭和49年の七夕豪雨では、白田浜で大規模な土砂災害が発生し、伊豆急行線の線路や道路が土砂に埋もれる被害を受けました。この際、海岸に岬ができるほどの土砂が流れたとされています。

さらに、伊豆大島近海地震ではトンネルが崩れる被害があり、その後、旧アスト会館付近を経由する稲取片瀬線の整備が行われるきっかけとなりました。

2 白田片瀬コンパクトシティ検討会議について

(1) 目的役割

白田片瀬コンパクトシティ検討会議は、人口が減ってもコンパクトなまちづくりを進め、町民の幸福度を向上させ、地域の将来像やゾーニングの検討を白田片瀬地区から始めることを目的に、令和6年4月にキックオフ会議を

開催しました。委員については、町のアドバイザーに加え、白田片瀬地区で募集を行い10名で計5回開催しました。

(2) 開催日時

令和6年4月30日（火） 13：30 保健福祉センター2F
令和6年8月26日（月） 14：00 保健福祉センター2F
令和6年9月26日（木） 19：00 保健福祉センター2F
令和7年1月31日（金） 19：00 保健福祉センター2F
令和7年3月24日（月） 書面開催

3 課題と将来像

(1) 課題

白田片瀬地区は、町内で唯一区画整理が実施され、整備された道路や都市公園により住みやすい環境が整っています。しかし、地域全体としては、依然として多くの課題を抱えています。特に、人口減少と少子高齢化の進行に伴う空き家の増加は、将来、深刻な問題となり、地域コミュニティのつながりを希薄化させ、崩壊の危機を招くおそれがあります。

また、若年層の流出による地域活力の低下や事業者の減少によるサービス低下も懸念されており、このままでは将来的な地域の維持が難しくなる可能性があります。これらの課題に対処するためには、空き家対策として「移住・定住」や「二地域居住者」の支援に加え、住民同士のつながりを再構築する取組が求められています。

さらに、白田片瀬地区は過去に多くの災害を経験しており、防災対策を強化したまちづくりの実現が必要となっています。

これらの課題を総合的に解決することで、地域の持続可能性を高めることが求められています。

(2) 将来像

今後、人口減少に伴う空き家の増加に対応するため、防災の観点と地域特性を活かしたゾーニングを行い、コンパクトなまちづくりを進めると同時に、

地域内外を結ぶ交通ネットワークを強化し、住民が便利で快適に暮らせる「コンパクトシティ&ネットワーク」の実現を目指します。

また、美しい海岸の景観や豊富な温泉を活用した観光エリア、駅周辺や国道沿いの商業エリアといった地域の特性を生かしたまちづくりを進めます。これにより、免許返納者を含む高齢者、子育て世代、移住者及び二地域居住者にとっても選ばれる、住みやすさと活力に満ちた地域を目指します。

① コンパクトシティ&ネットワーク

住民の移動に関しては強制的にはいかないので、過去に経験した災害を教訓にし、防災に配慮したゾーニングを行い、新しい世代が緩やかに移動することで地域住民がより安全に住める環境づくりを進めていきます。

また、今後、空き家の増加に伴う地域コミュニティの衰退やサービスの低下が懸念される中で、コンパクトなまちづくりを進めることによって、一定のコミュニティカやサービスを維持していきます。

交通施策では、駅を中心としたまちづくりを推進します。現在進めている公共ライドシェアに加え、様々な地域交通についてチャレンジを行い、人口が減少する中でも地域の移動手段を確保し、住民の行動量を増やす施策を展開していきます。

② ゾーニング

白田片瀬地区は、過去に区画整理が実施されており、既にコンパクトなまちづくりが進められています。今後は、防災対策を強化しつつ、駅前や国道沿いといった商業適地、相模灘の景色や温泉を活用した観光適地、さらには保健福祉センターなどの既存施設を活かしたゾーニングを行い、地域特性を反映した住みよいまちづくりを推進していきます。

当会議では白田片瀬地区を大きく3つのゾーンに分けて提案します。

(ア) 「観光・健康利用ゾーン」

白田片瀬地区には、町道白田熱川線がしらなみ橋から地区を横断しています。この町道白田熱川線から海岸付近のエリアを「観光・健康利用ゾーン」と位置付けました。このエリアは津波浸水想定区域に含まれるため、積極的に居住を推進する地域ではありません。しかし、相模灘に浮かぶ伊豆大島の景観や豊富な湯量の温泉を活用した観光地としての発展、また、

保健福祉センターを拠点とした健康増進エリアとしての活用を提案します。

既に宿泊施設が点在しているこの地域では、新たな観光・商業施設の誘致を進めるとともに、住民や観光客がスポーツを楽しめる環境の整備も目指します。

(イ)「拠点・産業利用ゾーン」

町道白田熱川線と伊豆急行線の間を「拠点・産業利用ゾーン」と位置付けました。このエリアは津波浸水想定区域に含まれるため、積極的に居住を推進する地域ではありません。しかし、かさ上げや迅速な避難が可能な体制を整備し、店舗や事務所の誘致を進めるエリアとして提案します。

津波対策については、令和2年3月に決定された「静岡方式」に基づき、景観に配慮しながらも、避難による命を守る行動を柱としています。

さらに、津波シェルターの導入なども検討項目のひとつとし、住民の避難行動をより効果的に促進します。

(ウ)「居住利用ゾーン」

伊豆急行線から国道135号沿道を経て旧白田川橋の上流側付近までのエリアを「居住利用ゾーン」と位置付けました。この区域は津波浸水想定区域からほぼ外れていますが、白田川氾濫時の浸水想定区域に含まれるため、かさ上げなどの対策が必要です。

両側には急峻な土砂災害警戒区域が広がっているため、白田川と土砂災害警戒区域の間に位置する安全なエリアへの緩やかな居住誘導が求められます。

また、このエリアには駅や国道があり、商業適地としての利便性が高いため、今後も賑わいを維持し、地域の発展を図ることが必要です。

白田地区・片瀬地区における過去の災害

過去の大きな災害

- ・昭和 33 年 狩野川台風
- ・昭和 49 年 七夕豪雨
- ・昭和 53 年 伊豆大島近海地震
- ・令和元年 台風 19 号による豪雨

【昭和 33 年 狩野川台風】

- ・白田川橋の道の 2～3m 下に田んぼがあった。台風上陸が稲の収穫時期で台風後は稲の上に砂が堆積し、道路の高さまで砂がきていた。
- ・東泉院の裏山が崩れて本堂が流された。
- ・白田川は浄水場の下取水場あたりから氾濫した。
- ・片瀬地区では片菅神社の少し上流から白田川が氾濫し、片瀬地区が冠水・浸水。
- ・旧東映ホテル付近で大規模な土砂崩れ、旧法華荘周辺が崩れた。
- ・湯ヶ岡の川の上流に住んでいた家が流され、亡くなられた方がいた。

【昭和 49 年 七夕豪雨】

- ・磯辺の白田側の手前周辺で国道も崩れる大規模な土砂災害が発生。
- ・伊豆急線の線路も飲み込まれて海まで流され、家も 2～3 軒流された。その土砂が堆積していた時期があり、半島のようなものができた。

【昭和 53 年 伊豆大島近海地震】

- ・片瀬の坂町周辺が崩れた。
- ・旧道のトンネルが崩れ、その後旧アスト会館付近の稲取片瀬線が整備された。
- ・伊豆大島近海地震の際は噂が飛び交い、デマに惑わされた。(城東地区が全滅、下田で大火事が発生などの噂は、すべてデマだった)

【令和元年 台風 19 号による豪雨】

- ・花いち側の護岸下の広場が流され、熱川温泉病院・九分団周辺の護岸が崩れた。
- ・浄水場の護岸が削られ浄水場への水の供給が止まり、消防団でポンプアップを行った。

【その他災害】

- ・昭和 54 年頃、湯ヶ岡の普應寺が鉄砲水で壊れた。
- ・東泉院付近の長谷川水路が 40 年程前に溢れ 5～6 軒被害が出た。
- ・片瀬の坂町周辺で土砂崩れがあり、昔は年中ぬかるんでいる土地だった。

白田片瀬コンパクトシティ検討会議 意見

【土地】

- 街の真ん中に国道があり、インフラが通っているので利用価値はとても高く、観光客も誘致しやすい。
- 住宅地として住むには最高の場所だと思っている。

【人口】

- 人口減少で祭りや消防団などに影響が出ている。
- 人口増にするには、子どもの支援策を考えて増やしていくべき。

【防災・災害】

- 昭和33年の狩野川台風を最後に白田川は氾濫していない。
- 伊豆大島近海地震では横揺れがすごかった。国道が通れず、稲取白田間は栄分譲地を片側通行で車を通した。
- 熱川中学校へ学校が統合になった場合、災害時の通学が心配。
- 災害時道路が通れない際、船の利用はどうか。船の発着用に整備が必要。

【白田川橋】

- 白田片瀬を一つと考えると橋が重要。橋がないと白田と片瀬が非常に遠い。
- 町民の税金を何億円も使うのでしっかりと検討が必要。

【子育て】

- 平な場所が多いので小さな子どもでも散歩しやすく、自分の体力的にもちょうどよい。白田片瀬地区は比較的子育てしやすい環境である。
- 遊べる公園がないことがデメリット。遊具がないので子どもたちが飽きてしまう。のびのび子どもだけで遊べる場所が昔に比べ少なくなった。

【教育】

- 島留学など国内留学制度により、勉強をしながら地元のことを知ってもらう環境を作ればよい。
- 東海岸は動物に関係する施設がたくさんある。動物と関わっていく学校、できれば稲取高校に特殊な科目や水産科をつくったらどうか。

【移住・関係人口】

- 魅力があり選ばれて移住してきている自治体であれば、衰退せず選ばれ続ける。しっかり魅力を発信できる町になることが重要。

- 住むところがないと移住者も来ない。
- 第六キッチンやイーストドックのような努力が必要。交流人口を増やす。

【活用方法】

- 海を見ながら足湯に入れるカフェや遊べる場所、宿泊・お土産屋があったら観光客が来ると思う。海沿いに何かできると魅力的になる。
- 平らな土地を活用しグラウンド・ランニング・新スポーツ・合宿誘致はどうか。
- 旧戸田市保養所などもったいない場所がたくさんある。企業を誘致できるか。
- 国道・白田川橋周辺に地元の人も使える観光スポットがあったら盛んになる。
- 雨が降った時に行ける場所があると観光客は逃げていかない。普段使いできる町民に密着した施設であれば、観光地としてのアピールポイントにもなる。
- ヘリポートがあるので、災害用と・富裕層向けの観光の二軸はどうか。

【農業】

- ニューサマーオレンジに付加価値をつけてここだけのものを作る。
- 農業のバックアップをしなければならない。農業の後継者がいない。休耕地が増えてきているが活用できないか。

【商業・観光】

- 地元の人が行って、いつも賑わっている施設が重要。お年寄りが自分の畑で作った農作物や手作りおはぎを売れる環境があったらよい。
- 1回で終わるのではなく、ずっと町の人たちと繋がっていける商業施設があったらよい。観光客に選ばれて地元で愛されることが大切。
- 東伊豆町ならではのものを見つけて、そこを一つ突き通し、日本一を目指す。

【運動・健康】

- 大人も子供も運動できる施設がほしい。
- 海がありながら泳げない子が増えている感じがする。幼少期からの体力向上も浸水地域を使用してできたらよい。温泉プールもあったらよい。
- 保健福祉センター・介護事業所・病院があり健康づくりの拠点である。
- 健康寿命が大事。若い人だけがいきいきしているのではなく、年をとってもやりたいことができ、日常生活を自分で行えることが生活のベースとなる。

【SNS】

- 最近 SNS で熱川のカターラのプールや稲取の池尻プールがバズっていた。SNSでヒットしているものを取り入れたり、町のSNSをもっと活用すべき。

ゾーニング案

